

願成寺報

令和二年三月十六日

〒四四〇・〇八二二 豊橋市東新町二十八番地

☎ 〇五三二・五二一・九六〇一

春季彼岸・永代経のご案内

今このままを慶ぶことが 仏様への報恩です
そのままの慶びを ご一緒に 見つめ直しましょう

〇餅つき・草取り会

恒例になり
つき立ての餅をオヤツにします。
だんだん仲間が増えてきました。
楽しいです

是非、ご参

コロナウイルス 感染防止の為 法会を中止します

餅つき・草取り会

法要のみ

法要・落語、法話

成田屋紫蝶 師、住職

お斎（昼食）

法要・落語、法話

成田屋紫蝶 師、住職



本当のものがわからないと

本当でないものを 本当にする

安田理深

コロナショックでトイレットペーパーがなくなったそうだ。
中国の原材料が不足し生産中止の状態というデマに発して、
皆が買い漁り、流通が間に合わず本当に店頭から消えてしまった。
生産現場は、もともと日本の原材料にて元気に増産中だという。
景気は気だというが、コロナショックで株価が乱高下している。
小さなウイルスが、大きすぎる経済社会の危うさを教えてくれた。
当たり前だと思っていた日常は、脆く崩れ易いものだったのだ。
当たり前と思う根拠に、どれだけ本当の事が入っているだろう。
当たり前と思う前に、その日常での出会いを慶びたいと思う。
「私には本当の事はわからない」こそ本当だろう。
ならば、私は、どのように歩めばよいのだろうか。

親鸞におきては「ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべし」と、
よき人の仰せを被りて信ずるほかに、別の子細なきなり。

念仏は、まことに浄土に生まるるたねにてやはんべるらん、
また地獄に墮つる業にてやはんべるらん、
総じてもって存知せざるなり。

たとい法然聖人にすかされまいらせて、
念仏して地獄に墮ちたりとも、さらに後悔すべからず候。
そのゆえは、自余の行を励みて仏になるべかりける身が、
念仏を申して地獄にも墮ちて候わばこそ、
「すかされたてまつりて」という後悔も候わぬ。

いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

《歎異抄・第二章 抜粹》

● 正信偈ノート ②7・源空章Ⅱ

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

還来生死輪転家 決以疑情為所止
速入寂靜無為樂 必以信心為能入

黄色の勤行本の

四十二ページから

生死輪転の家に還来することは、決するに疑情をもって所止とす。速やかに寂靜無為の樂(みやこ)に入ることは、必ず信心をもって能入とす、といえり。

〔浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〕

- ・生死輪転家 輪廻転生する迷いの世界(六道)
- ・還来 行ったり来たり彷徨う事(輪廻)
- ・疑情 煩惱我執に囚われて阿弥陀仏の功徳を疑う心
- ・所止 留まって抜け出せない事
- ・寂靜無為樂 そのままの功徳に包まれた覚りの世界(極樂浄土)
- ・信心 阿弥陀仏の本願と功徳を大前提とした心
善導大師の三心(至誠心・深信心・回向發願心)
- ・能入 入ることができる

・悔いのない生き方

悔いのない生き方とは、課題に対する成果の可否ではなく、真面目に荷ったかどうか、その姿勢が問われるのだと思う。課題は、短期のものから人生を懸けるような長期のものまである。また、個人的(家族・地域・国家・人類全体等)と大きさも様々だ。そして、その時の体力・知力・財力・社会的地位・病や事件事故・災害等によって変更を余儀なくされる。成功に留まらず失敗に挫けない。降りかかる火の粉を払うように、直面する課題に対して真摯に過ごすしかない。しかし、その場当たりの対応だけで悔いは残らないだろうか。

もっと深い所に「仏に遇う」という課題があるのだと思う。闇の

中で光に遇うような出来事が起こり、その光の中で共に在るのだと確信し、ゆるぎない感動を朋友と分かち合えて歩めれば、それが本当に悔いのない生き方になるのだと思う。

・法然上人の場合

法然上人が人生の柱とした課題は「己と衆生を救う道を求めよ」の、父の遺言だったと思う。しかしその道は闇に鎖されていた。

我が心に相応する法門ありや。我が身に堪えたる修行あるや。萬の智者に求め、諸々の学者に訪いしに、教うるに人もなく、示すに輩もなし。しかる間、嘆き嘆き経蔵に入り、悲しみ悲しみ聖教に向かいて、手ずからみずから開き見しに、善導和尚の觀經の疏の「一心専念弥陀名号 行住坐臥 不問時節久近 念念不捨者 是名正定之業 順彼仏願故」という文を見得。 『四十八卷伝』

歡喜のあまりに聞く人なかりしかども、予がごときの下機の行法は、阿弥陀仏の法蔵因位の昔、かねて定め置かるやと、感悅髓に徹り、落涙千行なりき。ついに承安五年の春、齡四十三の時、たちどころに余行をすてて一向専修念仏門に入りて始めて六万遍を唱う。 『十六門記』

善導大師を弥陀の化身と仰ぎ、本願念仏を勝易の行法と選び取り、有縁の人々に伝えて歩まれた人生は、極彩色だったのだと思う。

・親鸞聖人の受け止め

聖人は、『文沙汰して賢々しき人に対して、「往生適わぬ」と仰っておられた』と、師匠のエピソードを手紙に記している。納得できない、納得するまで念仏申さぬと頑張る人、自分の小さなモノサシで大きな功徳を測ろうとする人、疑い心のある人は、仏に遇えないと頷き教えられた。聖人も法然上人を仏と仰ぎ、その教えに聞きつつ、仲間と共に、豊かに過ごされた。

両聖人を仏と仰ぐかどうか、そんな課題が私達に託されている。

円遵上人の手紙

・手紙

無病息災なる者も頓死することあり。まして病の床に臥しては、このたび限りにて本復は叶いがたしと、覚悟を極め候が第一の心得に候。かく心得おり候いても、寿命あれば本復し、また次第に弱りても俄かに驚かぬ用心にて候。

さてかく心得候上には、お念佛申し候が肝要にて候。念仏申せば本願の御約束の力にて、必ず極楽に往生すること疑いなく候。極楽はさまさま面白く楽しく美しき所にて、身にも心にも少しも憂い悩みなく、そのうえ、親子、兄弟、眷属も皆々集まりおり候ことに候。臨終には阿弥陀佛・二十五の菩薩の御迎えにて、賑わしく生まれ行くことなれば、一人死して行くと心細く思わぬがよ候。

遅れ先立つもしばらくの間にて、いずれ皆々参る極楽なれば、たしかにただただ念佛申すが肝要に候。あなかしこ。

南無阿弥陀佛。

言ひめへ

円遵

・真宗高田派十八世 円遵上人

円遵上人は、江戸時代中期、有栖川宮家から入室し、若くして宗門を任されることとなった。自他を律するのに厳しい人柄で、教学のみならず教養行儀の向上にも努め、七十余歳で遷化した。その生涯は二歳の息男と十六歳の息女にも先立たれ、大火に遭うなど平坦なものではなかった。

右は、嫁ぎ先で病の床に臥す息女、言姫(こ



とひめ)へ宛てた手紙である。書き出しから、気休めで励ますのではない、厳しい文章となっているが、子を想う暖かさも伝わってくる。筆で書かれた文字には涙で滲んだ箇所があると聞く。別れの悲しみの中で、どうしても伝えたかった大切な事柄が、格調高く簡潔に記されている。

・覚悟を極める(第一の心得)

「何が悪かったのか」「どうすれば良くなるのか」病人は二つの問いに悩むが、答えは得られず悶々として、食欲をなくし、病気を悪くする。原因と対処法は医者任せ、本人は平静で居るのが良いだろう。悪あがきで苦を重ねる愚を戒めている。治らないと覚悟を極めればスッキリする。

病気でなくても「思い通り」を基準にすれば、娑婆は善悪の苦界である。何時でも「思い通り」を手放せる覚悟が必要だ。

・お念仏を申す(第二の心得)

「念仏を申せば極楽に往生すること疑いなく候」父を信じて疑いをなくせ、と云えばただの気休めとなる。そうではなく、念仏を申せば、念仏申した人々の声が聞こえる。諸仏に囲まれ、弥陀に照らされていると感じられてくる筈だ。当人がそれを感じてこそ、疑いがなくなるのだと示されていると思う。

寝ているばかりで役にも立たず、お荷物としての其方を、沢山の方が案じて世話をしてくれている。有難いと思う毎に「生まれて良かった」といのちが深まる。我儘な思いに囚われて悶々とするばかりでは、たとえ長生きをしたとしても、しくじった人生となってしまうのだぞ。

・浄土での再会(第三の心得)

また会う世界があるのだから、最後まで投げやりにならず、出来る事を丁寧に行い、念仏の声を美しく残す様に過ごして欲しい。

行事予定 令和二年春以降

五月と六月の月例会の開催日を変更しました、ご注意ください。

八月十五日(土) お盆・歓喜会(住職)

法要・法話で亡き人を偲びます
軽食・花火あり
午後六時

九月二十日(日) 秋季彼岸・永代経法会(戸田恵信師)

お馴染みの先生の情熱的な法話です
お非時(昼食)あり
午前十時～午後一時

十二月三日(火) 本山納骨堂法会・団体参拝

本山へ貸切バスにて団体参拝します
午前六時半ごろ集合

十二月五日(土) 報恩講(節談説教 西川舜優師)

御開山聖人御恩に報いる法会です
お非時(昼食)あり
五日 午後一時半
六日 午前十時～午後一時半

四月十二月 月例会

毎月一日 午後二時～ 日時変更の場合があります、
寺までご確認ください

五月と六月は二日に
変更します
ご迷惑をお掛けします



花まつり 於豊橋別院

四月九日 午後一時～ 華展・茶会
十日 午前十時～ 華展・茶会
十日 午後二時～ 仏教講話

講題 仏教的落語でお笑いを!
講師 落語 桂文月 師匠

後記

勝手にライバル

私の誕生日は昭和三十五年二月二十三日、令和天皇と全く同じ日
で、お互いに還暦を迎えることとなった。畏れ多いことであるが、
誕生日が同じだと、それだけでどこか親近感があり、勝手にライバ
ルだと思っている。

小さい頃は、皇室に生まれて皆にチャホヤされている彼が羨まし
かった。私は寺に生まれて、学校では「坊主と乞食は三日やったら
辞められない」とバカにされ、家では「お布施で生活しているのだ
から我慢しなさい」と諭されて、全くオモシロくなかった。彼に比
べればこっちは罰ゲームのようで、抜け出す為に頑張った。

私には抜け出そうと思うこと、そのために努力したり、グレたりす
る自由があった。彼にはそんな自由はなかったのかも知れない。本
当は、彼の方が罰ゲームだったのだと思う。

彼は窮屈だと同情している。大きな期待を荷う、「国民の象徴」を
生きる苦労は想像に及ばない。奔放な弟君の言行と比べても、家族
にバッシングが及んだ場合にも、静かに重責を背負っておられる
姿が貴い。彼は立派な天皇として還暦を迎えられた。テレビ等で笑
顔を拝見すると、励まされて涙がこぼれる。

還暦に想う

特別な感慨はなく、祝って貰いたいとも思わない。さぎ波の様な事
件は沢山あったが、大病などの大波には洗われていない。周囲に助
けられて平穏にやってきた。助けられるばかりで、誰かを助けたか
と問うと自信がない。親孝行のエピソードも一つもない。

父母に誇れることならただ一つ、この寺報がある。この紙面で第四
十五号となる。毎回苦しくて、知恵も知識もない中で雑巾を絞るよ
うに書いている。内容に自信がある訳ではない。逆に、自信がない
のによく続けてきたなど我ながら感心し、これだけは父母も褒め
てくれていると感じている。

大切なご案内があるのに、毎回お届けが遅くてお詫びします。